

強迫性とレジリエンスが大学生の大学生生活適応感に及ぼす影響

小林 勝年 浅川 潔司

<要約>

人は人生を脅かすような問題に直面しても、誰もが身体的・精神的に健康な状態に陥るのではなく、心身をより良い状態に維持し、日常生活にうまく適応する能力を有する。このように困難で脅威的な状況にもかかわらず、逆境に耐え、試練を克服し、感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持する心理特性（森・清水・石田・富永・Hiew, 2002）を「レジリエンス」という。本研究では、レジリエンスに影響を与える要因として、大学生のサポート資源のなかで最も重要な意味を持つと考えられている友人関係に着目しレジリエンスとの関連を検討する。また、友人関係の主たる規定因として自己愛、特にその中でも強迫性を含む病理的側面との関連についても調べ、大学生の大学生生活適応感に及ぼす影響について検討した。

【問題】

青年期における友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格的共鳴や同一視をもたらすような関係の特徴とし、これによって新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進される（西平, 1973）とされてきた。しかし、今日、青年たちの友人関係が希薄化しているという報告が増え、青年期における「発達の危機」が懸念されている。例えば、岡田（1995）は現代における青年の友人関係の特徴を「表面的で快活な関係を求める傾向」、「内面的関係を避ける傾向」、「相手に気を使う傾向」と分類し、現代の青年が互いに傷つけあわないよう希薄ではあるが、表面的に円滑な関係を志向する友人関係を形成する傾向を明らかにしている。内面的な関係を避ける友人関係の希薄化は、良好な友人関係を築くことを難しくするとともに（吉原・藤生, 2005）、社会適応性を低下させ、自己の発達において未熟な特徴を露呈する（岡田, 2007）。

ここで、友人関係希薄化の規定因として「自己愛のあり様」について関心が注がれる。Gabbard(1989)は病理的な自己愛として「誇大型」・「過敏型」の2つの類型を試みているがこれらは外部刺激からの柔軟性と自己における統一性に欠ける面からある種の「強迫性」を予測する。小塩（1998）は「誇大型」の自己愛を示す者のうち、「注目・賞賛欲求」を高く報告する者は、広く浅い友人関係をとるとした。自分では自信を持っているが、自己像が不安定であるがゆえ、他者からの肯定的評価が容易に崩れるような深い対人関係を回避し、広く表面的につき合うことで自己肯定の感覚を維持していると言う。また、高橋(2006)によれば、「過敏型」の自己愛傾向者は、承認欲求の影響を強く受ける傾向にあるため、学校満足感が低いと言う。

近年、適応をめぐる議論において重要な心理的要因としてレジリエンスが挙げられるが、レジリエンスの形成には、「環境資源」が欠かせない。井隼・中村（2008）は、家族や友人からのサポートなど「環境資源の認知」、さらには認知された環境資源をどのように生かすかという「環境資源の活用」を指摘した。石毛・無藤（2005）は、「友だちサポート」とレジリエンスを関連づけ、鈴木（2006）は、「向社会的行動」の構成要素としてレジリエンスを指摘した。このように、レジリエンス研究の

文脈において個人をとりまくソーシャルサポートの効果についての検証が蓄積されてきた。しかし、大学生のソーシャルサポートのなかで最も重要とされる友人関係のあり様やそれと関連深い「強迫性を内包する自己愛傾向」がレジリエンスに与える影響に関しては、組織的かつ実証的な研究はほとんどなされていない。そこで、本研究は、友人関係のあり様および自己愛傾向がレジリエンスにどのような影響を及ぼしているのかについて分析を行うこととする。まず、研究Ⅰでは、「友人関係」とレジリエンスとの関連について明らかにし、研究Ⅱでは、「自己愛傾向」とレジリエンスとの関連について検討することとする。そして大学生の学生生活適応感にどのような影響を与えているのかについて総合的に検討したい。

【方法】 実施時期、調査対象および手続き

2010年7月に、鳥取県内の大学生150名（有効回答146名、男23名、女123名）に対して、授業時間を利用して一斉に質問紙調査を実施した。

《研究Ⅰ》

(1) 友人関係性尺度：吉原・藤生（2005）で作成された友人関係性尺度が大学生の対人関係を測定するために用いられた。本尺度は、「関係拒否性」「親密性」「依存性」「無関心性」の4つの下位尺度からなる29項目に、無関心性を反映すると考えられる2項目を新たに加えて作成した31項目で構成した。本尺度は、「よくあてはまる(4点)」から「まったくあてはまらない(1点)」の4件法で回答が求められた。

(2) レジリエンス尺度：本研究では、森 他(2002)で作成されたレジリエンス尺度「I AM」「I HAVE」「I CAN」「I WILL」の4因子、36項目から成る尺度を使用した。回答形式は「よくあてはまる(4点)」から「まったくあてはまらない(1点)」の4件法で回答を求めた。

【結果】

友人関係性尺度31項目に対して、主因子法による因子分析(バリマックス回転)を実施した。その結果、解釈可能な4因子が抽出された。これにより、第Ⅰ因子については「親密性」、第Ⅱ因子は「関係拒否性」、第Ⅲ因子は「依存性」、第Ⅳ因子は「無関心性」と命名された。各因子とも、因子負荷量が.400以上で、他の負荷との差が少なくとも.100あるものが抽出された。友人関係性尺度の整合性を検討するために、下位尺度の「関係拒否性」と「無関心性」について逆転項目として処理を行い、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、友人関係性尺度全体で $\alpha = .839$ 、第Ⅰ因子で $\alpha = .861$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .809$ 、第Ⅲ因子で $\alpha = .779$ 、第Ⅳ因子で $\alpha = .742$ となった。

レジリエンス尺度の得点について、主因子解による因子分析(バリマックス回転)を行ったところ、解釈可能な3因子が抽出された。第Ⅰ因子については「可能性追求」、第Ⅱ因子については「対人的信頼」、第Ⅲ因子は「自己肯定」と命名された。各因子とも因子負荷量が、.400以上で、他の因子負荷との差が少なくとも.100あるものが抽出された。

レジリエンス尺度の内的整合性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、レジリエンス尺度全体で $\alpha = .910$ 、第Ⅰ因子で $\alpha = .884$ 、第Ⅱ因子で $\alpha = .871$ 、第Ⅲ因子で $\alpha = .802$ 、の値

を得、内部一貫性があると判断した。

友人関係性尺度とレジリエンス尺度について、各得点間の相関を分析した結果、友人関係における「親密性」と「レジリエンス総合」にかなりの高い正の相関がみられた。また、友人への「関係拒否性」と「レジリエンス総合」に低い負の相関がみられた。さらに、友人関係の「親密性」とレジリエンスの下位尺度の「可能性追求」、「対人的信頼」、「自己肯定」にはかなりの高い正の相関が示され、友人への「依存性」とレジリエンス下位尺度の「対人的信頼」では低い正の相関が示された。友人との「関係拒否性」については、レジリエンス下位尺度の「対人的信頼」にかなり高い負の相関がみられ、「無関心性」は「対人的信頼」に低い負の相関を示した。

【考察】

レジリエンス総合および、全てのレジリエンス下位尺度と高い正の相関がみられたため、親密な友人関係をもつことはレジリエンスを高める要因になることが示唆される。関係拒否性は、依存を求めつつもうまく依存できないあり方のため、不適応に陥りやすい関係性である。レジリエンス総合とレジリエンス下位尺度の「対人信頼」にかなり高い負の相関がみられたことから、友人とよい関係を結べないことは、対人信頼を築けず適切な友人サポートが得られないため、不適応に陥りやすいと考えられた。一方、依存性は肯定的な配慮や反応を友人に求める欲求が強く、その欲求が満足できない場面では不適応になりやすい。依存性とレジリエンス総合との間には相関はなかったものの、レジリエンス下位尺度の「対人信頼」と低い正の相関が示された。この結果から、友人への依存性が不適応に繋がるとされる従来の研究結果とは一致せず、友人に依存することはレジリエンス下位尺度の対人信頼を高めるという適応的側面が検証された。

橋本（2000）は無関心性が適応の良さを示すとしているが、本研究では、無関心性とレジリエンス総合において有意な差はなかった。友人に無関心であることはレジリエンス総合に影響しないという点では従来の研究を支持する結果を得たといえる。しかし、レジリエンス下位尺度の「対人信頼」には低いながらも負の相関が見出され、無関心性の不適応的側面が示唆される結果となった。無関心でいることは、他者への信頼感が低いことと関連するという本研究の結果から、困難な状況に直面しても適切な友人サポートを得ることができないため不適応に陥りやすいことが示唆された。

《研究Ⅱ》

- （1）自己愛傾向尺度：高橋（2008）で作成された自己愛傾向尺度、「対人過敏性」「回避性傾向」「自己愛的な怒り」の3因子からなる42項目を使用した。回答形式は4件法で回答を求めた。
- （2）レジリエンス尺度：研究Ⅰで使用したレジリエンス尺度を使用した。同様に4件法で回答を求めた。

【結果】

自己愛傾向尺度の検討 自己愛傾向尺度の信頼性係数は全体で、 $\alpha = .953$ であった。

レジリエンス尺度～研究Ⅰに示すとおりであった。

自己愛傾向尺度の分散分析～個人の自己愛水準が、レジリエンスに与える影響について検討するた

めに、一要因一元配置の分散分析を行ったところ、自己愛水準の主効果が有意であった

($F=14.53, DF=2/146, P<0.1$)。下位分析 (Tukey 法) の HSD 法による多重比較を行った結果、自己愛水準の、L群>M群>H群の関係で、レジリエンス得点が有意に高くなっていることがわかった (なお不等号は2%水準で有意差があったことを示している。以下同じ)。このことから、自己愛水準が低いほど、レジリエンスが高いことが明らかになった。

さらにレジリエンスの下位尺度および自己愛水準について多重比較を行った。その結果、レジリエンスの「可能性追求」では自己愛水準のH群が3群中最も低い値をとり、自己愛水準のL群>H群, L群>M群の得点差を得た。このことから、「可能性追求」は自己愛傾向の低い者ほど高い得点を示すと言える。

レジリエンスの「対人的信頼」でも自己愛水準のH群が最も低い値を得た。多重比較の結果はL群>H群, M群>H群であった。しかし自己愛水準のL群とM群の間では有意な差が得られなかった。したがって、自己愛傾向の高い者ほど他者を信頼できない傾向が強まると言えよう。

レジリエンス下位尺度の「自己肯定」では、多重比較の結果、L群>M群>H群の関係が示された。特に自己愛水準のL群とH群の平均値の差が最も高く、次いでL群・M群、最後にM群・H群の順で主効果が見られた。つまり自己愛水準の低い者ほど自己肯定の感覚を維持できる群であることが示された。

【考察】

自己愛の高い者ほどレジリエンスが低いことが見出され、自己愛傾向がレジリエンスに影響を与えることが明らかにされた。さらに、レジリエンス下位尺度の「可能性追求」や「自己肯定」は自己愛水準の低さが関連しているという結果より、自己の可能性の追求や自己肯定の感覚を得るためには、自己愛傾向を出来る限り抑制することが重要であることが推測された。また、自己愛の高まりに従って、レジリエンス下位尺度の「対人的信頼」が低くなるという結果から、他者への信頼感を高めるには自己愛を低減させることが必要であると考えられる。総じて、大学生が困難や障害に直面した際に、うまく適応するためには、自己愛傾向を抑制できるような支援が重要であることが示唆された。

【総合的考察】

岡田 (2007) は、最近の若者たちはコミュニケーションの機会が減少し、友人関係の希薄化と自己愛傾向に特徴づけられると指摘している。本研究は、大学生の友人関係のあり方および、大学生の希薄な友人関係を特徴づける自己愛傾向がレジリエンスに与える影響を検証することであったが、レジリエンスの向上において、親密な友人関係を形成することや自己愛傾向を抑制すること等の方向性が示された。今後はレジリエンスを高めるうえで、自己及び相手を信頼できる能力を育む、親密なコミュニケーションに基づいた友人関係の構築を考慮する必要があると考える。